



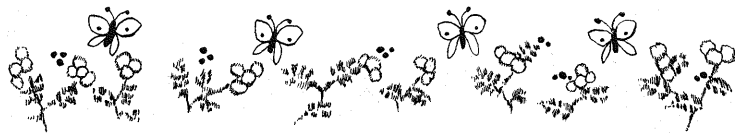
『幼児の教育』と私

思い出すままに

井上 直子

お茶の水女子大学の門を足早に入り、附属幼稚園（日本幼稚園協会）の郵便ポストへ。「ない!」、幼稚園の中の津守先生の研究室へ小走りで……。『きてない!』、庶務課へダツシユ。依頼して、届いているはずの原稿が、どこにもきていない。一つも……。『原稿どこ!』と走りながらなぜか学生食堂、本校舎へと大学中を走りまわっている私。原稿をお願いした先生にお電話すると「えっ、頼まれていませんよ!」「ガン! どうしましょう。又、私のせいで休刊! 津守先生、ごめんなさい……」(夢)。

どきどきしながら目がさめ、ほっとする。そんなことは、実際には一度もなかった

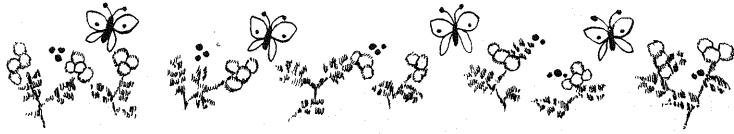


のに。編集の実務（第六十四巻から第七十巻・九六年間）から遠ざかって、約三十年がたつのに、未だに同じような夢を時々見るのです。

津守先生から、前任者の木原（赤池）さんが大学院に席をおかれたので、その後を、と私にお声がかかった時、どのような事をするのか、全くわかりませんでした。学生時代から『幼児の教育』は、教科書のように読んでいましたが、実は、編集スタッフは、五、六人いて、実務をなさっているものと思っていましたから、たった一人で実務をとうかがった時、目が点になったのです。木原さんは、明るく「だいじょうぶよ、私にできたのだから……」と淡々とおっしゃられます。

実家が幼稚園をやっていましたので、子どもの教育に関わっていきたくて考えていました。そのためにもより多くのことを学びたいという気持ちは、人一倍強かったです。思っています。私のそんな気持ちを津守先生が察して下さったのだと思います。

その頃、津守先生は、倉橋惣三選集（第一巻～第四巻）の編集も手がけていらして、毎日、膨大なペラ刷りに目をとおしておられました。その表紙及び扉の字と絵を東山魁夷画伯のお宅にうかがっていたら、私に原画を見せて下さりながら、東山画伯が、かざらない、実におだやかな方……など、又倉橋先生と東山先生との接点などぼつぼつ話して下さいました。私は、銀座の松屋で開かれた東山魁夷展（昭和三十六年五月）を見に行き、すっかりファンになりました。その原画は、

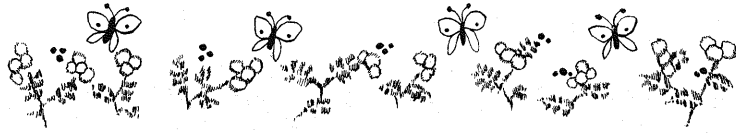


図案化されたくじやくのような、かんむりばどのようなとりで、単純で、愛らしく、品がありました。東山先生が、倉橋先生のイメージを一点に表わされているのだと感じました。倉橋先生が、長い間『幼児の教育』の編集主幹でいらつしやり、先生のお考えが、子どもの教育の本質についておられる事を、津守先生はじめ、多くの先生方から学んでもきていました。不安は大きかったのですが、学ぶ事もつと大きい……。津守先生とお話していくうちに、やってみようと思っていました。

先日、この原稿を書くにあたり、いくつか確認したい事がありましたので、附属幼稚園の榊田先生のご了解を得て、当時、私が関わった第六十四巻から第七十巻までを中心に見せていただきに園長室（創刊号から一年分を一巻として製本されている）にうかがいました。第一〇〇巻の中の六、七巻、私に関わった前も後も連綿と続いているのです。何と多くの方々がご執筆下さっている事か。編集のお手伝いできました事、本当にうれしく思いました。改めて、一〇〇巻おめでとうございます。

倉橋先生の書かれたもの（書物）、先生に関する事を書かれたもの、先生のお教えを受けた方々の書かれたもの、今、読みかえしても、新しい事におどろきます。附属幼稚園の先生方も毎日とてもお忙しいのに、毎年六月号には、現場の保育を報告して下さいました。

巻頭言を書いて下さる先生方、多くの心理学者、教育学者、保育学会の方々、現場



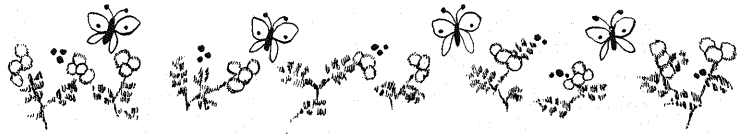
の先生方、他の分野の方々と、津守先生は、多くの協力して下さる先生方をお持ちでした。一〇〇巻一月号で編集方針を改めて、読ませていただきましたが、毎月、毎月の事なので、そのご苦労は大変な事だったと思います。原稿依頼の打ち合わせをしたり、お目を通された原稿や先生の原稿をいただきに、白金のお宅によくうかがわせていただきました。

編集にたずさわってまもなく、六十四頁から七十二頁（第六十五巻第四号）になりました。八頁増えたのです。大変と思う反面、少しでも読みやすいようにと思いました。表紙の次に扉をもうけ、目次を見開きにし、余裕を持たせたり、幼児の日常の姿を撮った写真の頁、子どもの詩の頁と、読み手がほっと一息つける頁を考えました。扉、目次、子どもの写真など今に続いているのですね。

第七十巻一月号より、附属幼稚園の園長・周郷先生、本田先生、附属幼稚園の先生方も加わって下さり、編集委員会が持たれるようになりました。私は、その何か月か後に、実務の仕事を赤間さんにお願ひし、辞しました。

私は、この六年の間に、本当に多くの方々に学ばせていただき、お世話になりました。この仕事に就かなければお会いする事もなかったであろう多くのすばらしい方々にお会いすることができました。

千葉大学の園芸学部の浅山英一先生は、ご自宅の広い温室に私を案内して下さい、



観葉植物の名前や育て方、株の増やし方等熱心に説明して下さいました。

チューリップのユング研究所へ留学され、帰られたばかりの秋山さと子先生の新宿・若松町のお宅に原稿をいただきにうかがった折、「まだできてないの。今書き上げますから」と、広いじゅうたんをひきつめたがらんとしたお部屋で、外国の絵本を何冊か出して見せて下さいました。今住まわれている所が、ご実家のお寺の敷地内であり、子どもの頃の遊び場であった事、ユングの夢分析を学んでこられた事など興味深いお話をうかがう事ができました。その後、数多くの研究書を出され、私も手にとらせていただきました。今、冒頭の私の夢をお話したら、どんな分析をして下さったのでしょうか。訃報をお聞きした時、笑顔と赤いブレザーを召した先生のお姿が目にかびました。

私は、辞した後、結婚、出産。主人の転勤でアメリカのシアトルに四年程住み、帰国。実家の幼稚園にもどり、幼い子どもたちとの毎日が続いています。子どもたちと接する時、「子ども一人ひとりになまの人間としてふれる事。子どもが心を開いてくれるように。子どもの心の中に湧き起こるすばらしい力を見る目、聞く耳を持たなければ、それを伸ばす事はできない。子どもと心を通わせ、子どもから学ぶ姿勢が大切」と、津守先生がいつもおっしゃられ、実践されていた事が基本になっている自分を発見し、感謝の気持ちで一ぱいです。

(大崎幼稚園)